

氏名（本籍）	荒 <sup>アラ</sup> 木 <sup>キ</sup> 亨 <sup>キョウ</sup> 子 <sup>コ</sup> （東京都）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第205号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉「蝶番」・「傾ぐ静物」シリーズ 〈論文〉絵のありか
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 准教授（美術学部） 齋藤典彦
（論文第1副査）	〃 〃（〃） 佐藤道信
（作品第1副査）	〃 教授（〃） 関出
（副査）	〃 准教授（〃） 植田一穂

（論文内容の要旨）

絵をつくる間、いろいろ揺らぎながら試行錯誤し手探りで制作を行う。

絵具を塗る、離れて見る。見た画面をもとにイメージが発生し、新たな着想を得て、また絵具を塗る。画面の絵具に触発されて、次の絵具を塗る。絵を見る。進んでいく絵が手掛かりとなって次の画面へ展開する。一度塗った絵具に違和感が生じれば、お湯をかけて落とす。お湯で落とした絵具は、下の絵具と混ざり、思いがけない表情が現われる。そうして現われる画面を見て、可能性を探る。模索しながら進めていく。手探りで取ったりつけたりした絵具や、偶然の表情など様々の積み重ねが、紙の上で層になる。その時々重ねた絵具が、それぞれの役目を持って1つの視覚になる。画面のそれぞれの絵具が、ゆるやかな要因となって突然〈何か〉を示す、〈何か〉になる。それを目にする、心にどよめきが生じる。

私が制作をしている目的はここにある。〈何か〉に出会う瞬間である。偶然性に手助けしてもらいながらも、選択を繰り返して道を辿っている。多くの判断から生まれる結果が〈何か〉になり、絵が完成する。この〈何か〉という特別の視覚が、制作の根拠であり拠り所である。しかし、〈何か〉の存在は非常に不明瞭である。〈何か〉とは何であるのか。絵の中の何が、どのように作用して特別の視覚となるのか。制作の推移・過程を取り上げながら探った。

第Ⅰ章では、2002年から2004年に制作した人物制作について考察した。人物表現では、“ひと”の内面に焦点をあて制作を行った。矛盾や葛藤といった多層の精神構造、次元の異なる多様のベクトルを持ったまま“ひとつのひと”の中に収まって機能している様子を、対の人物を用いて表現しようとした。“ひとりのひとのあり方”、“ひとの在りよう”を言おうと取り組んだものであった。

人物の「図」と背景の「地」で画面を構成し、空間や状況もできる限り取り除き要素を限定し、人物のかたちだけが浮かび上がるような表現とした。ひとのかたち・ひとのフォルムが制作の手助けとなった一方で、徐々に制約となり、人物のみを絵としているような窮屈さが生じてきた。画面全体で絵を作って行きたい、という思いから、静物への移行を決めた。

第Ⅱ章では、静物表現について論じる。「傾ぐ静物」と題して“眺められた静物”“ひとに認識された静物”を目指した。臨場感と関係性への興味から出発した。静物画へ移行するきっかけとなったのが、モンドリアンの「生姜壺のある静物Ⅰ」という作品である。この絵に感じた揺らぎの魅力と臨場感、そ

してそこから出発した静物画での試みを、作品を通して考察した。

また描くテーマがモチーフであった人物制作の段階から、静物をモチーフにして以降、絵自体の視覚または、絵・画面の状態に関心が高まっていった。そうして制作する中で、前述の〈何か〉になる瞬間が、疑問且つ目的になり始めた。静物を媒体として、画面に現れた視覚の作用を探るようになった。第Ⅲ章では、静物表現の研究として行ったアプローチとその結果から〈何か〉のありかについても考察した。

制作の1枚1枚が、テーマの進展・研究の発展であり、その経緯が〈何か〉に迫るアプローチと考える。作品の流れから〈何か〉の存在を示せればと考えた。